

●はなせ診療所そよ風だより No.50

2014年11月 内科 吉澤泰介

◎先月日本東洋医学会があり、漢方の症例の発表をしてきました。

● 漢方エキス剤の至適投与量の問題と、アスリート(運動家)を通して経験した補瀉兼施(強い薬と補う薬)のバランスの重要性。以下分かりやすい文にしています。

【症例】「1例目」78歳女性 主訴;約2年前から冷えると、右足の付け根、陰部に痛みが走った。前の医師からもらっても効かなかった、当帰四逆加呉茱萸生姜湯(とうきしぎやくかごしゅゆしょうきょうとう)を、一度に3倍量で飲んだら、直後から痛みがおさまり、その後時々おきても3倍量で飲めば、すぐに治まっている。「2例目」18歳男子アスリート。幼少から解毒症体質(かぜをひきやすく、すぐに扁桃腺をはらす。思春期に、にきびがよくできるなど)。高校で強豪校の陸上競技部に所属、主に三段跳びを専門種目とし、過酷なトレーニング、負荷の強い跳躍練習などによる足の痛みや、上熱下寒(頭がのぼせるのに足が冷たい)、霜焼けなどができ、2年生の春頃から、故障(腰痛)を繰り返すようになった為、当帰四逆加呉茱萸生姜湯、桂枝茯苓丸(けいしぶくりょうがん)、黄耆建中湯(おうぎけんちゅうとう)、補中益気湯(ほちゅうえつきとう)など、強い薬でなく補う漢方を使ったところよくなった。

【まとめ】一例目は漢方薬の量の問題つまり漢方が効かないといって、別の薬を出す前に、量を増やせば効くことがある。例えば、お相撲さんに、普通の量を飲ませても効かない、大量必要である。人それぞれに応じて量の加減必要となる。2例目は、がっちりした運動選手が、強い漢方をのんでかえって悪化した。体型ばかりみて、強い薬を与えると、このように悪くさせ補う薬が必要となることがあるという内容です。ともに、現代漢方での問題点を突いた内容になっています。